

---

---

## 第1章 中国方言文化資源の保存と活用

岩田 礼

### 1. はじめに

小論は「文化資源学概論」での私の講義（2012年5月17日）をもとに、当日受講生の皆さんから出た質問や要望をふまえて、文章化したものである。

まず、“方言資源”というのは些かなじみが薄い概念と思われるので、少し長くなるが、以前書いた文章を引用することで、私なりの考えを示しておきたい。引用元は、金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第2集「国際シンポジウム：日中両国の方言の過去、現在、未来」（2008年3月刊）の“前言”である。

「文化」という言葉からイメージされるものは、無形文化であれ有形文化であれ、一般には *visible*（目に見える）なものであろう。空気のように *invisible*（目に見えない）な存在である言葉を“文化”の一つと捉える考え方は、或いは一般的ではないかもしれない。音楽は *invisible* であるが、その演奏者は *visible* である。同じく言語文化でも昔話の“語り”であれば、語り部という *visible* な存在がある。このような目に見えるパフォーマンスのみを“文化”と呼ぶのであれば、人口の数だけ存在すると言っても過言でない言葉のバリエーションはその範疇には入らない。ところが、話が“言語の絶滅”となれば、それを“無形文化”と呼ぶことへの抵抗感が薄れるに違いない。例えば、大清帝国の言語であった満州語は帝国の消滅からわずか数十年で絶滅の危機に瀕するに至った。言語の消滅はその民族存立の根拠を一つ失うことを意味する。そのような消失体験のない日本人にとっては別世界の出来事であるに違いないが、実は同様の状況が身近にある。『日本言語地図』（LAJ、国立国語研究所、1966～1974年）を見れば、そこに反映された各地の方言の多くがすでに消失寸前であることが理解されるだろう。

目に見えない文化を保存し、発展させていく手段は、それを使用する集団の政治的、経済的影響力を強化することしかない。しかしそれは事実上不可能である。本シンポジウムでは、日本、中国双方の講演者が、「方言はいずれ消え去る運命にある」と断言している。従って我々の任務は一義的には、方言をいかに記録し後世に残していくか、という点にある。

ここでいう“方言”とは、各地で数百年にわたって話され、受け継がれてきた伝統方言のことである。約百年前に西欧で調査が行われた時、また約半世紀前に日本で LAJ のための調査が行なわれた時、伝統方言はなお人々の身近に存在した。2001 年、北京語言大学の曹志耘教授をリーダーとする『漢語方言地図集』のプロジェクトが発足し、大規模な調査が実施された。その対象となったのは中国農村の伝統方言である。プロジェクトの開始からわずか 6 年余りの時間で、調査、編集、作図に至るすべての工程が完了し、まもなく 5 冊の地図集（北京、商務印書館）が刊行されるのは、奇跡などではなく、スタッフによる昼夜兼行、不眠不休の努力の成果にほかならない。このような歴史的偉業とも呼びうる事業に、我々日本の研究者と金沢大学が貢献できたことを誇りに思う。」（引用終わり）

上記で“日中無形文化遺産プロジェクト”と呼ぶのは、金沢大学連携融合事業「日中両国における無形文化遺産保護と新文化伝統創出に関する共同事業」のことである。このプロジェクトは文部科学省と金沢大学からの助成に恵まれて、2007 年度から 2011 年度までの 5 年間継続された。私の当初の任務は、上記引用文で紹介した北京語言大学・語言研究所『漢語方言地図集』3 卷（音声卷、語彙卷、語法卷、地図 510 葉）の編集と出版に協力することであった。上記国際シンポが開催された 2007 年 11 月はちょうど主編の曹志耘教授（現北京語言大学副学長）らが地図集の編纂で多忙を極めていた時期であり、無理を押して来日していただいた曹教授並びに趙日新教授、劉曉海氏には頭が下がる思いであった。その後、地図集の編纂は急ピッチで進み、翌 2008 年 11 月には出版された。直後、私は『漢語方言地図集』と曹志耘さんのこと」と題する紹介記事を東方書店のブックレットに書いた（岩田 2009）。この気楽に書いたエッセイは、本学国際文化資源学センターの客員教員でもある石汝杰先生（熊本学園大学）がすぐに中国語に訳して下さり、それが曹教授の「走過田野」というブログに掲載された結果、私の書いたものにしては多数の読者を得たようである。

その後、“日中無形文化遺産プロジェクト”も大詰めを迎えた 2012 年 3 月には、今度は“方言文化”をテーマとした日中共同シンポジウムを再び金沢で開催した。これについては、本文の最後で紹介する。

## 2. 『漢語方言地図集』と言語地理学

『漢語方言地図集』については、日中無形文化遺産プロジェクトのホームページに簡潔な紹介と 5 枚のサンプル地図が掲載されているので参照されたい。

<http://heritage.lt.kanazawa-u.ac.jp/projects/research/fangyan>

本体は、430 x 320mm という大部で高価なものだが、金沢大学では中央図書館のほか、国際文化資源学研究センター、人文学類中国語学中国文学研究室、同言語学研究室などに所蔵されている。各地図の凡例に挙げられた語形は、漢字表記しか示されて

いないので、非漢字文化圏の読者にはアクセスが困難であるが、序文は中国語原文のほか、英語訳と日本語訳が掲載されているので、概要は理解することができる。

言語地図には大きく言って2種類のものがある (Chambers & Trudgill 1980)。一つは、display map と呼ばれ、各調査地点で得られたデータを忠実に地図上に表示したもの。20 世紀初頭にヨーロッパで生まれた J. Gilliéron の『フランス言語図巻』や F. Wrede 等の『ドイツ言語地図』(所謂“Wenker Atlas”)はこれに当たる。もう一つは、interpretative map と呼ばれ、異なる語形の境界を等語線で表したり、百科事典によくあるように地域差を異なる色で表現したもの。中国で 1987 年に出版された『中国語言地図集』はこれに当たり、漢語方言の分布を区画して示している。実際には、display と interpretative の中間的な地図集も多い。国立国語研究所の『日本言語地図』や我々の『漢語方言解釈地図』(下記参照)は、display map の形式を取っているが、語形分類や記号の使い方に歴史的変化を考慮した“解釈”が入っている。

伝統方言の記録と保存を一義的な目的とした『漢語方言地図集』は、できるだけ事実を正確に反映するという方針を取り、この点では display map 的ではあるが、「方言地図が反映するのは抽出と帰納を経た言語現象である。・・・文法地図には、高度な抽象化を経たものがある。」(序文)と述べられているように、実際には解釈がかなり含まれている。例えば、語彙地図 068 「“手”及び“脚”の語義」は、“手”が hand、“脚”が foot だけを示す北方地域と hand/arm、foot/leg を語形の上で区別しない南方地域がちょうど長江を境に対立するという非常に綺麗な地図である。しかしこれは“手”、“脚”という語幹に着目した結果であって、前者が“手瓜”、“手骨”、“手臂”など、後者が“脚杆”、“脚骨”など、いくつもの複音節形式を含むことは表現されていない。また音声は伝統音韻論の知識を前提とする項目が多い。これは項目立ての原則として、「重要な地域差を反映する」ことのほかに、「重要な歴史的変化を反映する」ことを挙げたためである。

『漢語方言地図集』の出版を契機として、中国では方言地図を用いた研究の機運が高まり、2010 年 11 月には北京語言大学で第一回の「中国地理言語学国際学術研究討論集会」が開催された。この会議は、The Protection and the Utilization of Traditional Dialects in China and Japan (日中方言の保存と利用)なる副題が付けられ、金沢大学が共催機関となった。引き続き、2012 年 10 月には南京大学で第二回の同会議が開催された。ところがいずれの会議でも『漢語方言地図集』を利用した研究の数は多くなかった。この地図集には解説が付されていないので、「1 枚の地図から 1 本の論文が生まれる」(趙日新教授談)というのは決して誇張ではなく、宝の持ち腐れの感があるのは残念なことである。その根本原因は、地図上の分布から歴史的変化を推定するという言語地理学の考え方が中国で根付いていないためである。

現代社会、特に中国では、電子版の地図集ができれば、関心が高まるだろう。我々もそれを働きかけたことがあるが、直近の情報では欧米からのアプローチがある。ま

た調査データそのものが公開されれば、利用は飛躍的に増えるだろう。しかし言語地理学の立場から言えば、電子データの公開が研究を促進する保証はどこにもない。多様な目的に利用されるのは好ましいことだが、現状では本来の目的が忘却されてしまう危険性がある。

### 3. 方言情報の記録と保存：PHD プロジェクト

日本では方言に限らず、文化的要素の地理的な分布という発想が一般にも根付いている。例えば、昨年（2012年）3月に開催した“方言文化シンポジウム”で、富山大学の中井精一先生は、「食の地域性と方言圏」と題して、正月に食べる雑煮の形態について地域差を報告して下さった。北陸だけに限っても大きな地域差があることに驚いたが、そこには学生が集めたデータもあるとお話だった。中国でやってみれば面白い結果がたくさん得られるだろうと思うのだが、この種の研究は非常に少ない。“学問”だとは看做されない風土があるのかもしれない。中国の学会に出れば、この方言はどちらの方言区に属するのかという区画論、系統論や、地理的分布の形成を移民に求める歴史論が多く、研究風土の違いに戸惑う。

日本には柳田国男の『蝸牛考』以来の伝統があった所へ、戦後はグロータース（W. A. Grootaers）神父によってヨーロッパ流の言語地理学の方法がもたらされたことで、『日本言語地図』に代表される言語地理学の伝統が形成された。私もそのような伝統の下で育った一人だったので、1980年に中国留学の機会を得ると迷わずある地域の方言調査で言語地理学の方法を実践した（『テキスト 文化資源学』2011、73-74 参照）。その後、グロータース神父が1939年～1948年の10年間に中国で実践された言語地理学の成果を日本語に訳した（Grootaers 1994）。また1989年からは、日本国内の仲間達とともに全国地図作成の作業に取りかかった

- 1) 中国方言の記述に関する既刊資料を網羅的に集める。
- 2) 各資料が記載する方言の行政単位と位置（緯度、経度）を記録する。
- 3) 各資料が記載する言語データを記録する。
- 4) 上記2)、3)の情報をデータベースに蓄積する。
- 5) 言語データに基づいて方言地図を作成する。
- 6) 方言地図を解釈する。

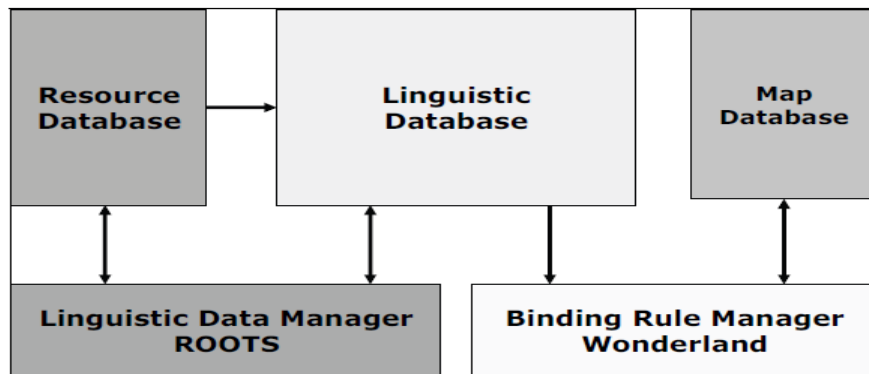
このプロジェクトは Project on Han Dialects（PHD）と呼んでいる（平田 1996 参照）。現在、中国の研究者との連携が可能になっているのは、このように我々の研究が中国の先を行っていたためである。

2003年4月に金沢大学に赴任した頃、中国では本質的な変化が起きつつあった。一つは2001年から『漢語方言地図集』編纂のためのプロジェクトが北京語言大学で開始されたことである。またこれと同時期に上記 Grootaers（1994）が石汝杰先生によっ

て中国語に翻訳され、2003年に刊行された (Grootaers 2003)。このような状況を受けて、私は2004年度から再び科研費の補助を受けて、新PHDプロジェクトを開始した。

新しいプロジェクトは、林智君（現人間社会環境研究科博士後期課程）が“PHD SYSTEM”と呼ばれる新システムを開発する所から始まった。このシステムの特徴をごく簡単にまとめると、

- (1) 上記1)～5)の工程をサーバー上で進めることができる。
- (2) 当時としては先進的だったXMLベースのシステムである。
- (3) 下図のように、資料（地点を含む）、言語、地図の3つのデータベースは、クライアント側のRootsとWonderlandという二つのツールによって操作される。



このシステムのメリットは計り知れない。データをWEB上で共有することができるようになった；因ってネット環境がありさえすれば世界中どこでも作業ができる；それ以前の科研によって蓄積した言語データはそのまま継承できた；地図データベースに蓄積された地図はいつでもPDFに出力できる；地図作成は簡単な正規表現を覚えればかなり複雑な語形分類までできる；複数項目の言語データを同時に読み込むことができる、等々である。2007年3月にこの科研が終了して以降は改良が進んでおらず、細部にはなお問題があるが、このシステムは現在に至るまで運用されている。

このように蓄積されたデータ数は下記の通りである。

① 資料・地点データ

- ・ 資料データ：書誌 6000 件強
- ・ 地点データ：県レベルの地理情報 3000 地点＋郷鎮・村落レベルの情報（未確認）

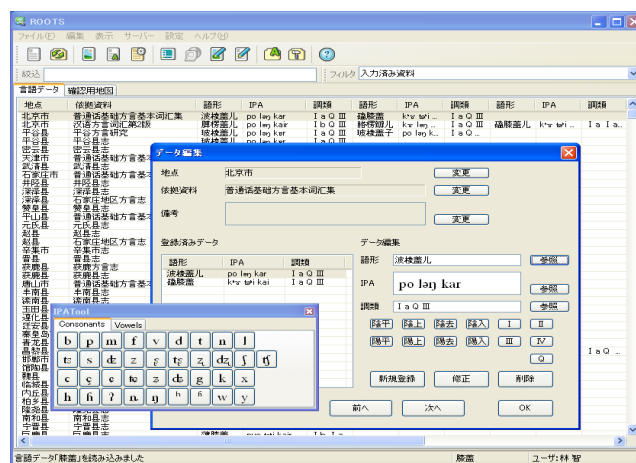
② 言語データ

約 300 項目。各項目とも多数の地点の情報を蓄積し、また 1 地点で複数の語形が併用されることが多いので、総データ数は数十万単位に上るはずである。正確な数は未確認。

③ 地図データ

約 500。

さて、この PHD システムは現在、会員制となっており、未公開である。私が定年になる前に公開したいと願っているが、多数のメンバーによって入力されてきた言語データは校正が大変である。下図は、入力ツール Roots のスクリーンショットである。入力欄は語形（漢字語形）、発音記号（IPA）、声調（調類）の三つがあるが、声調情報を入力できるのは音韻学に通じた専門家だけである。



#### 4. 方言地図の作成例

地図データについては、科研費研究成果公開促進費の助成を受けて、下記 2 冊の地図図集を出版した。

1. 『漢語方言解釈地図』、岩田礼編、岩田礼・村上之伸・木津祐子ほか 10 名著、白帝社、2009 年 12 月、49 項目、地図 95 葉。
2. 『漢語方言解釈地図 続集』、岩田礼編、岩田礼・木津祐子・中西裕樹ほか 8 名著、好文出版、2012 年 2 月、46 項目、地図 61 葉。

“解釈”の 2 文字を加えたのは、出版が先行した中国の『漢語方言地図集』との差異化を図ったものである。事実、語形分類や記号の使い方に歴史的変化を考慮した“解釈”が入っているほか、詳細な解説を各地図に配している。使用言語はすべて中国語と英語である。翌 2010 年には、早くも曹志耘教授の書評が中国の学術誌『方言』に掲載された（曹 2010）。『続集』の著者には 4 人の中国人研究者も含まれる。いずれも金沢大学で短期又は長期の研修を受けた若手である。

近年、私の研究上の関心は“語彙変化のメカニズム”に移っている。中国語方言の地図を作成することで明らかになるのは、ヨーロッパや日本の方言地図によって確認された変化のメカニズムが中国語でも確認されるという“言語変化の普遍性”である。言

語地理学の解釈は、個別地図についてケースバイケースで判断せざるをえず、自然科学のような数量的処理にはなじまない。近代化、都市化の進行に伴う伝統方言の衰退と相俟って、都市方言を対象とし、数量的処理を旨とする社会言語学に研究者の関心が向くのは自然の趨勢でもある。しかし 19 世紀以前の広大な農村地域において方言はどのように伝播し、変化していたか、また農民達は日常生活における事物をどのように認識していたか、これら歴史言語学の課題を解明できるのは言語地理学しかない。

次ページに地図の作成例を挙げた。これは Today を表す語形の分布であり、出典は『漢語方言解釈地図』Map 6。以下、若干の解説を加える。語形は地図凡例に倣って中国の簡体字で示す。

1) F 類（赤記号）：“今天”とその派生形

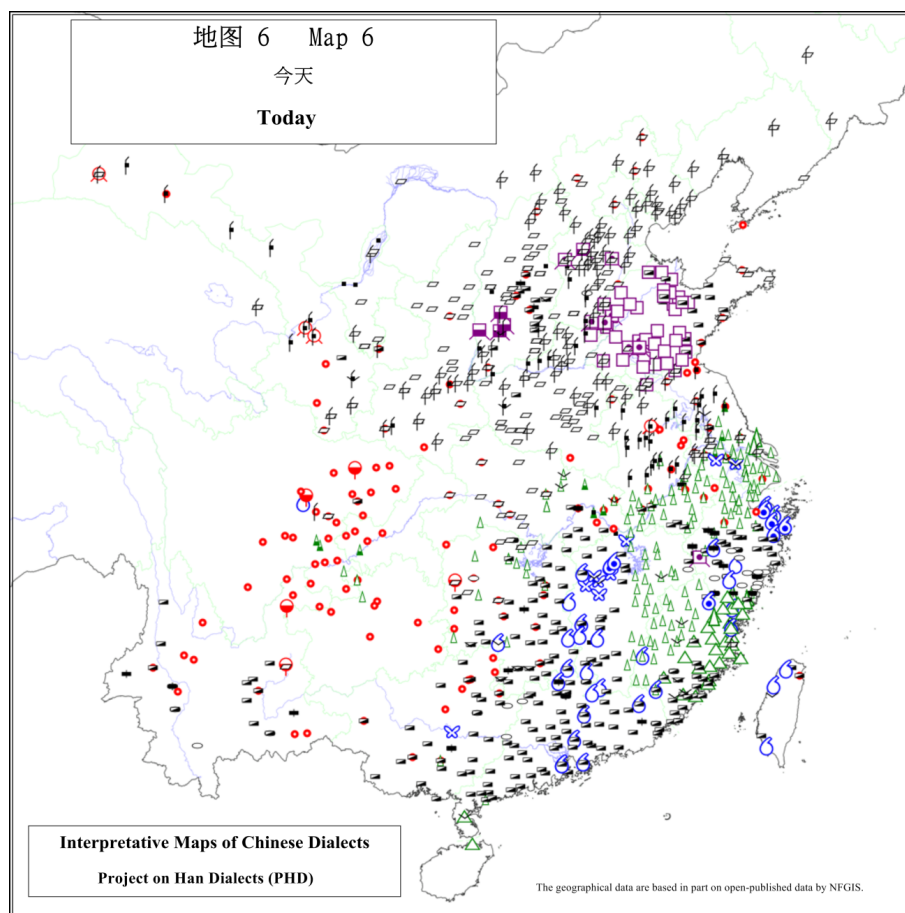
現代の標準語（普通話）語形であるが、北京周辺には分布することが少ない。北方地域全体でも“空から撒いたように”散在しているだけである。まとまった分布が見られるのは長江流域、特に四川省を中心とした西南地域である。これは何を意味するか？

2) A 類、B 類、G 類（黒記号）：“今日”とその派生形

この三類は全国に広く分布し、“今日”が最も古い語形であることを物語っている。A 類は“今日”が本来の姿を保っているもの。B 類は第二成分の“日”が弱化して接尾辞の“儿”に変化したもの。うち B-2 は“今儿”[tɕiər]のように二音節が融合・単音節化したもの。G 類ではさらに変化が進み、“日”が脱落してしまった。B-1 は A 類と B 類の中間的段階を反映し、[tɕin ə]のように融合・単音節化に至っていないもの。“今儿”のほか、“今日”と表記されることがあるので、例外措置として同じ記号で表示した。全体として、長江以南に A 類、長江以北に B 類と G 類が分布する傾向があり、北方で第二成分の弱化が進んだことがわかる。

3) E 類（紫記号）と縦線記号：第二成分が接尾辞

E 類は“今们”、“今里”のように、第二成分がこれまた接尾辞に変化してしまった語形である（“们”は人称代名詞の複数、“里”は場所を表すマーカー）。A 類、B 類に取り囲まれて分布することから、古くは“今日”であったものが、時間詞とは関係のない接尾辞に取り換えられたと推定される。このほか、北方には、元の記号に縦線記号が付加されたものが多い。これは量詞の“个”を表す。例えば北京では、“今儿”[tɕiər]のほかに“今儿个”[tɕiər kə]も使われる。中部の江蘇省、安徽省や西北の甘肅省などには“今个”が多数分布する。B 類、E 類、G 類を通じて言えることは、北方では時間詞が“儿、个、们、里”などの接尾辞を伴うようになったことである。なぜこのような変化が起きたのだろうか？



A. 今日 jinri, X+日 ri(X: demonstrative)

- A-1 今日 jinri ("日"自成音节/syllabic "ri")
- ✦ A-2 今日 jinri ("今"音不规则/irregular "jin")
- A-3 该日 gairi, 今日 geri, 这日 zheri etc.

B. 今儿 jin'er, jinr

- B-1 今儿 jin'er ("儿"自成音节/syllabic "er")
- ▷ B-2 今儿 jinr (儿化/non-syllabic -r)

C. 今朝 jinzhao, 今早 jinzao, 今旦 jindan

- △ C-1 今朝 jinzhao
- ▲ C-2 今朝 jinzhao("今"音不规则)
- △ C-3 今早 jinzao
- △ C-4 今旦 jindan

D. 今晡 jinbu, 今冥 jinming, 者冥 zheming

- ③ D-1 今晡 jinbu, 今晡日 jinburi

- ③ D-2 今冥 jinming, 者冥 zheming, 今晚 jinwan

E. 今们 jinmen, 今里 jinli

- E-1 今们 jinmen
- ③ E-2 今里 jinli, 今来 jinlai
- ③ E-3 今吗 jinma, 今麻 jinma

F. 今天 jintian

- F-1 今天 jintian, 今天儿 jintianr
- F-2 今几天 jintian
- F-3 今天 jintian

G. 无中心语/no head contained

- 今 jin (单音节/monosyllabic), 今个 jing etc.

H. 其他 / Others

- ✦ 今下 jinxia, 今牙 jinya

- ✓ 其他 / Others

※ 后缀/suffix

- | -个 ge



## 4) C類（緑記号）とD類（青記号）：語幹が「朝」や「夜」を示すもの

長江以南の東部に集中して分布している。C類は“今朝”、“今早”のように語幹（第二成分）が「朝」を示すもの。D類は“今冥”、“今晡”のように語幹が「夜」と関連するもの。Todayを表すのにどうして morning や evening を表す語幹を使うのだろうか？

以上主に三つの“謎”があり、それを解くことが言語地理学の課題である。『漢語方言解釈地図』pp. 84-87 に私なりの解答を書いた。中国語が読めなくても比較的詳細な英文要旨が付いている。

## 5. 方言と文化

言語は文化諸要素の一つであり、かつ最も表層的な文化現象である、と我々は考えている。であるならば、方言分布と他の文化諸要素の分布は連動するはずである。上述の雑煮の形態に関する地域差も一定程度方言差と連動している。

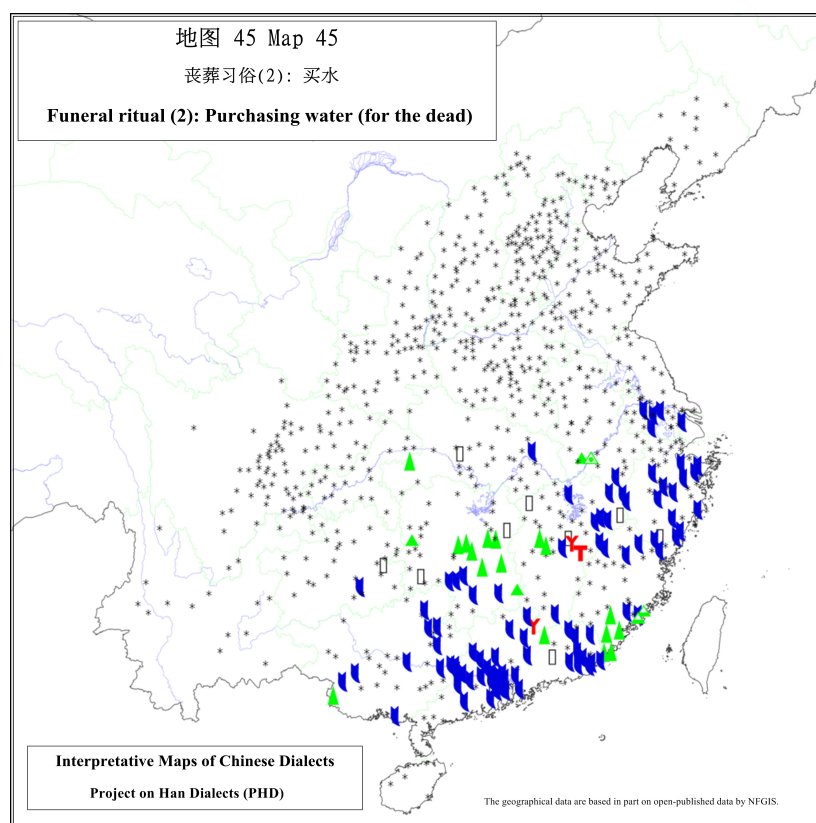
中国で最も早くこのことに着目し、調査を実践したのはグロータース神父であった。その成果は、Grootaers et al. (1948, 1951)、Grootaers (1958, 1993) などで公表されている。1949年以前の中国では、至る所に宗教施設（廟宇）が存在した。グロータース神父が調査したのは、河北省万全県、宣化県の全域及び山西省大同地域の一部に限られるが、そこに存在したすべての宗教施設を訪れ、歴史を含めて詳細な記録を残している。この地域内には、当時 348 の村落と一つの市（宣化市）があったが、そこには 1628 の廟宇と 2583 の宗教単位が存在した。“宗教単位”というのは、例えば観音廟と呼ばれる廟宇でも、関羽、真武、韋馱など別の神様が祀られていることがあり、それらに関する建物、像、木牌等をそれぞれ 1 単位と数える。グロータース神父の真骨頂は、言語地理学の方法に倣って、調査結果を地図上にプロットし、歴史や方言分布との相関関係を考察したことである。例えば、宣化県に存在する五道廟のうち、東南部のそれでは祭壇の中央部に山神が据えられているが、西部ではその位置に五道神が据えられている。民間信仰に見られるこのような地域差は、県内を北東→西南方向に走る等語線の東と比較的よく一致する（Grootaers 1994, pp. 158-162）。

現在の中国にはこのようなフィールドワークを実践する条件はない。観光用の大寺院はあっても、民間信仰の対象となるような廟宇はとうに消え去っているからである。しかし人が生の営みを続ける以上、家族の健康や年々の豊作を願い、出産や結婚を祝い、死者を弔うといった自然に発する信仰心が消え去るはずはない。比較的狭い地域を対象として、冠婚葬祭に関する聞き取り調査を行えば、それらのしきたりについてなにがしかの地域差が現われることがわかっている（岩田 2002）。

人間社会環境研究科博士後期課程の山本恭子さんは、葬礼をテーマとして江蘇省徐州地域や蘇州地域で聞き取り調査を行っている。これは言語調査よりもはるかに忍耐

力と注意力を要する仕事である。

聞き取り調査のほか、過去の記録を調べることによって地域差が明らかになることがある。山本さんは、中国の地方志（現代のものと民国以前のものがある）の葬礼関係の記述を網羅的に調べて情報を地図にプロットする作業を続けている。例えば、中国南方には死者の沐浴に使う水を眷族（主に息子、“孝子”と呼ばれる）が近くの川や井戸に行って“買ってくる”習俗がある。下図はその分布と名称を示したもの（『漢語方言解釈地図 続集』Map 46）。



有 "买水" 习俗 /The "maishui" ritual existing

- 买水 maishui
- 请水 qingshui
- 乞水 qishui
- 取水 qushui
- 起水 qishui
- 打河水 daheshui
- 活水 huoshui, 长生水 changshengshui
- 有习俗，缺名称 /no records on how it is called

\* 无相关文献记载 /no records on this ritual

2012年3月7、8日、我々は北京語言大学と共同で、「第1回中国方言文化国際学術討論集会」を金沢で開催した。これは曹志耘教授が着手されている“中国方言文化アーカイブ”構築プロジェクトを契機とし、中国側から要請があったものである。中国側報告者11名（他に台湾の研究者1名）の報告があり、日本から6件の報告があった（うち日本の方言文化に関する報告3件、中国文化に関する報告3件）。曹教授らが現在進めているのは、各地の伝統習慣、伝統芸能、農具、工具等の記述と映像化、音声化である。これは中国政府の文化政策に沿ったプロジェクトであるが、言語学に譬えれば、各地の方言の基礎的な記述研究を一から開始したような感があり、膨大な作業量となるであろう。国威発揚の手段ではなく、中国文化を底辺で支えた民間文化の組織的発掘となることを願っている。

## 参考文献

- 曹志耘 2010 「読岩田礼編《漢語方言解釈地図》」、『方言』2010-4、353-361。
- 曹志耘主編 2008 『漢語方言地図集』、商務印書館。
- Chambers, J.K. and Trudgill, Peter 1980 *Dialectology*, Cambridge University Press.
- Grootaers, W.A., Li, S.-Y. and Wang, F.-S. 1948 “Temples and History of Wanchüan 萬全 (Chahar): The Geographical Method Applied to Folklore”, *Monumenta Serica*, XIII-1, 209-317.
- Grootaers, W.A., Li, S.-Y. and Wang, F.-S. 1951 “Rural Temples around Hsüan-hua (South Chahar), Their Iconography and their History”, *Folklore Studies*, X-1, 1-116, Tokyo.
- Grootaers W. A. 1958 “Linguistic Geography of the Hsüan-hua region — Chahar Province”, *Bulletin of the Institute of History and Philology*, Academia Sinica, 29-1, 59-86.
- Grootaers, W.A. (グロータース) 1993 『中国の地方都市における信仰の実態—宣化市の宗教建造物全調査—』、寺出道雄訳、五月書房。
- Grootaers W. A. (グロータース) 1994 『中国の方言地理学のために』、岩田礼・橋爪正子共訳、好文出版。
- Grootaers W. A. (賀登崧) 2003 『漢語方言地理学』、石汝杰・岩田礼共訳、上海教育出版社。
- 平田昌司 1996 「日本における中国語方言学研究」、『言語研究』110、169-176。
- 岩田礼 2002 「中国農村の言葉と文化」、樋泉克夫・若代直哉編『現代中国への道案内』、白帝社、9-32。
- 岩田礼 2009 「『漢語方言地図集』と曹志耘さんのこと」、『東方』338、2-5、東方書店。
- 岩田礼編 2009 『漢語方言解釈地図 *The Interpretative Maps of Chinese Dialects*』、白帝社。
- 岩田礼編 2012 『漢語方言解釈地図 続集 *The Interpretative Maps of Chinese Dialects, Volume Two*』、好文出版。